電線のビニールとおばさん。

奥田徹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
電線のビニールとおばさん。

【Ｎコード】
Ｎ６０５１Ｔ

【作者名】
奥田徹

【あらすじ】
電線にビニールが引っ掛かってた。僕は田舎から出て来たおばさんと銀座で二人きりにされた。

毎朝並ぶバス停。真上の電線に、ビニール袋が引っ掛かっていた。
二週間ぐらいずっと引っ掛かってる。
バスを待つ間、何となく眺める。
風の強い日にバタバタと激しく揺れてたり、
ダランと垂れ下がっている日や、
心地好さげに風を受けている日もある。

日常の間、ビニールの事はすっかり忘れてるのだけど、
朝、バス停に来て、列に並び、ポカンと上を見ると
「あ、まだある。」
と、そのビニールの存在を思い出す。
ビニールを眺めてる間は、日常の事を忘てる。
その動き方を、ただただ目で追って頭を休ませる。
そんな時間は好きだった。

先週の土曜日、バイト先の先輩に突然呼び出され銀座へ出た。
「暇だろ？ちょっと銀座へ出てこいよ。」

待ち合わせ場所の地下鉄Ｂ８出口を出た先の
案内地図板前に着くと、
先輩と、５０代後半の小太りなおばさんが立っていた。
「母親。田舎から、出て来たんだ。」
「あ、どうも、始めまして。先輩にはいつも…」
「こちらこそ、いつも息子がお世話になってます。」
と、丁寧に頭を下げられた。
挨拶もそこそこに、先輩は、僕を手招きすると、小声で

「悪いんだけど、2時間程、母親の相手してくれないかな…どうしても外せない用事があってさ」
「え?、どういう…」
「近いうち埋め合わせすっからさ、頼む、な」
僕の返事を待たずして、
「母さん、すぐ戻るから、ちょっとだけ、こいつに銀座案内してもらってて」
と、告げると、地下鉄改札に向かい、目の前のエスカレーターを駆け降りて行った。
「あ、ちょ…」
先輩の姿は、あっという間に見えなくなった。
立ち尽くす僕に、おばさんは、申し訳なさそうな顔をして、
「すみません。あの、良いですよ、私、一人でそこら辺、歩いてますから」
一瞬、それでいいならとも思ったが、
おばさんの明らかに不安そうな顔がそこにあり、
「いや、そんなに僕も銀座知らないんですけど…付き添いますよ」
「本当ですか?すみません。助かります。」
おばさんは、沢山の人が行き交う大通りで、
何度も僕に頭を下げ、感謝した。
「田舎者だから、こんな場所、恐くて」

おばさんは、シルクなのか、ビニールなのか、よく反射する紺色のワンピースを着ていた。
服全体に広がる薄ピンクの横線が、小太りを目立たせた。
白いスカーフを首に巻いていて、昨日、美容室に行ってきた感じの、しっかりとしたパーマが頭を随分と大きく見せてた。
都会に合わせよう、失礼の無いようにしよう、そんな感じで、普段、タンスの奥にしまってあるいつもは着ない洋服を着て、出来るだけ精一杯のオシャレ。

それが、より一層、都会から浮いてしまっている様は
僕に何とも言えない素朴さを思い出させた。

「どこか行きたい所ありますか？」
「いや、銀座にいるってだけで舞い上がっちゃって…」
「欲しい物とか、買いたい洋服だとか？」
「…あの、安いカメラとかどこかに…写るんですとかで良いんだけども…」
「カメラ？」
「せっかく銀座来たんで、記念に写真を撮りたくて…」
困ったような、嬉しいような、恥ずかしげに、申し訳なさげに、だけどハッキリとした口調でおばさんは言った。

「カメラですか…」
「いや、すみません、変な事言ってますかね、私」
「あ、携帯持ってます？」
「携帯無いです私…」
「無いんですか？…じゃあ、僕の携帯で撮りますよ。」
「え？」
「ちゃんと先輩の携帯にメールしますから…」
「え、あの…」
おばさんは僕の言ってる意味が、理解出来なかった様子で、
困った様な愛想笑いを浮かべながら
「写るんですで良いので…」
と小声で言った。

シンプルでいいんだ。
僕はヒョコヒョコと歩くおばさんの歩幅に合わせ、ビッグカメラへ
行き、
「写るんです」を見つけた。

おばさんはまた何度か僕にお辞儀を繰り返した後、慌ててレジへと向かった。

町を歩きながら、お店や、人混み、
ビル等、対象がハッキリしない物を真剣な眼差しで
写真を撮っているおばさん。

「あの…撮りましょうか？ご自分も写った方が…」
「え、良いんですか？」
「はい。」
「すみません。お願いします」
両手で差し出すように手渡された写るんです。
枚数は後、五枚になってた。
「どう撮りましょうか？」
「え、あ、じゃあ、あれと私が写る様に…」
と、大きな時計を指差す。僕は写るんですを構え、構図を探す。
結構な大通りで、沢山の人が行き交う。
おばさんは多少強張り、緊張した面持ちで、
丸太の様に直立している。
誰かがクスクスと笑った。

「ありがとうございます」
「他にも撮りましょうか」
「え、あ、じゃ…」
おばさんは逆に、何か探さないといけないと、慌てた素振りで、
辺りを見回し、オロオロ。
ふと立ち止まり、何人かが、写真を撮っていた、並木通り沿いの
テディベアミュージアムを見て、
「私もあそこで…」

と言った。
ミュージアム前のガラスケースに大きな、テディベアの縫いぐるみが三体。
その前で二人組の女性が交互に、
派手なポーズで写真に収まり、さっていった。

順番待ちの様に、その様子を眺めていた僕達。
「じゃ、そこに立ってください」
と、またも緊張した面持ちのおばさんをテディベアの前に立たせ、
「じゃあ、撮りますよ」
と、僕が言った時、
おばさんが、ぎこちなくニコッと笑った。

「あ…」
「え？…何か変でしたか？」
「…。」
撮り終え、僕は何故か胸が締め付けられるような気持ちになっていた。
写真に笑顔で写りたい。
そうだよな…。

僕はもっと、自然と笑えてる、おばさんの写真を残してあげたいと思った。
せっかくの記念写真なんだ。

僕は辺りを見回した。大きな荷物をビルに搬入している業者が目についた。
そのビルを見上げ、
「良い所あります。もう一枚、いきましょう！」
「へ？、はい…」

僕とおばさんは、搬入している業者に続き、ビルに入り、
エレベーターに乗る。
一番上まで上り、踊場に着く
「あの…どこへ…」
不安そうなおばさんを横目に、
踊場の少し上にある扉を開けると屋上に出た。

「ほら、来て下さい」
恐る恐る、やってくるおばさん、がハッと息を飲み込むと、
「あらま、こりゃ凄い」
１１階建て、銀座のビル屋上。
見下ろした先に拡がる大都会の町並みに
高い空。
ちょうど、右側に東京タワー。左側に建築途中のスカイツリーが見
えた。
「こりゃ、贅沢ですね！」
「銀座、ちょうど、タワー二つの中間なんですよ。大丈夫ですか？
恐くないですか？」
「はい、大丈夫です。それに…」
「それに？」
「空が近いです。落ち着きます。」
と言ってニッコリ笑った。
「見上げたらバカ高いビルばっかりだったから、
ちょっと恐かったんです。でも、ここなら、いつも見上げてる空と
一緒だ。」
「そうですか、良かった。」
ちょうど良い風。おばさんの表情も和らぐ。東京タワー、スカイツ
リー、それぞれをバックに一枚ずつ写真を撮った。
リラックスした素敵な笑顔を向けてくれた。

「さ、逃げますか」
「へ？」

先輩から着信があり、おばさんを無事、引き渡した。
最後に、大通りの真ん中で先輩とおばさんを立たせ写真を撮った。
先輩は不満げだったけど、
その時のおばさんの笑顔は、一番素敵だった。

二人と別れ、家路へ。
バス停を降りた時、空を見上げた。
電線に引っ掛かっていたビニールが
無くなっていた。

空が少しだけ、
近くに感じた気がした。

（後書き）

テディベアミュージアムの前で田舎な感じのおばさんが息子らしき人に写真を撮られてたんですが、その時、ニコッと笑ってまして、こんな話を書きました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6051t/

電線のビニールとおばさん。

2011年5月28日22時36分発行